

第3の誘惑

出エジプト記 32:15-24

賈 晶淳

福音書を読みますと、ほぼ前の部分にイエスが荒野で悪魔から誘惑を受けている場面が紹介されています。今日はイエスが受けたこの誘惑の中で、第3の誘惑について考えてみたいと思います。それにしても聖書の本文が出エジプト記になっているのか疑問に思われる方がいらっしゃると思いますが、その生命は後で申し上げます。

もう少し誘惑の内容について詳しく見てみたいと思います。

イエスがヨハネから洗礼を受けた後から公的活動を始める前に、イエスは一人で荒野に行つて40日間過されます。その荒野ではサタン、悪魔から誘惑を受けたと、マタイ、マルコ、ルカによる福音書に書かれています。ただ、マルコの場合は誘惑の内容がなく、マタイとルカに三つの誘惑の内容が記されています。その三つの誘惑についてはご存じだと思いますが繰り返してみますと、第1の誘惑は、イエスが何にも食わず空腹を覚えられた時に「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」という内容です。第2の誘惑は、イエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界の全ての国々を見せてから、「もしも私を拝むなら、この国の一切の権力と繁栄とはあなたに者になる。」という内容です。第3の誘惑は、エルサレムの神殿の屋根の端にイエスを連れて行き立たせ、「神の子ならここで飛び降りたらどうだ。神はあなたのために天使たちに命じて、しっかり守らせる」という誘惑です。ただ、この誘惑の順番はルカによる順番でマタイとは第2、第3の誘惑が逆になっています。ですから今日の証詞の題はルカの順番に基づいたものです。

この三つの誘惑を見ていると、第1と第2の誘惑は何となくわかりそうな気がします。大体の人が求めている、豊かさや名誉や権力のようなものではないかと思えます。ただ、ルカにおける第3の誘惑をどう理解し、どう受け止めれば良いのかがこれまでのわたし自身の難問でした。しかし、これについて最近何となく分かったような気がしまして今日のテーマにしました。この第3の誘惑とは聖書を見る限り、神殿の屋根の端から飛び降りて何のメリットがあるのかがよく分かりません。何が得られるのかだけではなく、何を言おうとしているのかも分かりません。これについての参考書から納得しそうな答えも未だ見ておりません。ここを奇跡とみている人はいます。確かに高いところから飛び降りても神に守られ、命が助けられ、怪我しないのは奇跡でありましょう。しかし、わざと飛び降りるまでのことをしなくてもいいのではないかと思います。そもそも何でこの誘惑が三つの誘惑の中に入っているのかが理解しがたいところです。

もし、この誘惑は神のお守り、神の保護として考えてみたしましょう。例えば、病気になった時、何か困難な状況に置かれている時に、私たちは神のお守りを切に祈ります。これならじつとも可笑しくないところです。神を信仰する者として当然持ちうる内容だと思えます。祈りはこれにもっともふさわしい形だと思えます。イエスも最期の時にオリーブ山で神に祈られた時のことがルカによる福音書22章39節以下に書かれています。苦難と死を前にしたイエスが、42節で「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。」と祈られたのはこのような事ではないかと思えます。その44節には「イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。」と記されています。切なる祈りです。このような祈りなら普遍的な価値を持つものと思えます。しかし、問題は何故それを「誘惑」といえるのか、そして何故イエスはこれが「誘惑」だと思われ断られたのかというのが今日の疑問です。

福音書には「誘惑」という言葉がそれほど多く使われていません。荒野の誘惑の他にはこのオリーブ山でのイエスが祈られた時に、この時も3度一緒に祈っている弟子たちに「誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい」と注意をするところに使われています。そして、もう1箇所あります。それは皆さんもご存じだのところで、「主の祈り」です。「われらをこころみにあわせず」、ルカの本文では「わたしたちを誘惑に遭わせないでください。」(11章4節)と書かれています。即ち、私たちもイエスのこの

誘惑への拒否が主の祈りを通して毎回祈られているというのは私たちの信仰においてもとても大切な内容であることを示しています。このように私たちも困難な時は神のお守りを切に祈ります。

しかし問題は、もしも三つ目の誘惑がこのように困難な時の神のお守りを求めることでありましたら、当然と思われるこのこれらを、どうして聖書はこのことを三つの誘惑の一つとし、しかも、イエスはこれを拒否したのでしょうか。このままに理解すると神に保護を求めること自体が誘惑という話になります。一体、第3の誘惑とは何かと最初の疑問に戻ってしまいます。ここでもう一度三つの誘惑について考えてみたいと思います。

荒野での飢えと極端な孤独の中で、最大なる誘惑はこの三つの誘惑を合わせるもの、即ち悪魔として現れる自分の中に存在するエゴが活発に活動し始める段階で、それに負けやすくなる状況でもあります。飢えている人にパンの誘惑、そして世界の全てが得られるというのも飢えと孤独の最もなる誘惑です。同じく、第3の誘惑もエゴに関するのですが、それでも分からないのです。

しかし、イエスの荒野の後の生涯の全体を眺めると、このことも分かりそうな気がします。イエスはその生涯において富や豊かさを求めたことはありません。そして、世の権力を求めたこともありません。そして、先のオリーブ山での祈りの内容に42節で「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。」と祈られた後に、「しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行なって下さい。」と祈られます。この祈りこそまさに第3の誘惑からの脱出とみていいものではないかと思えます。イエスは神のお守りも断りました。イエスは自ら、恥辱の後、十字架の苦難と死を受け入れるのです。十字架の上でも神に助けを求めません。そうしますと、私たちの信仰の内容は神のお守りまでお断りするほどまでのことになるのでしょうか。

ここで、今日の聖書である出エジプト記の話に移ります。今日の聖書の内容で絵を書いてみると想像してみます。そうすると巨大なる二つの内容が並べられと思えます。一方には神から与えられた石板を持って、それを投げつけようとするモーセ、片方には金の子牛に拝もうとするモーセの兄であり、大祭司であるアロンとその群れです。絵の背景には雲に覆われているシナイ山が書かれています。エジプトを脱出したイスラエルの民は荒野を旅し、シナイ山の麓にたどり着きまして、そこでモーセはシナイ山に登り、40日間滞在します。無論、この間イエスの荒野での過し方のように、何にも食べずに滞在します。そして、神から頂いた十戒の石板を持って山を降りて行きます。その時に山の下では何が起きていたのでしょうか。誘惑に負けたアロンがイスラエルの民から金を集め、子牛を造り、それに自分たちを導いてくれるように拝み、祈っているのです。十戒の石板を持っているモーセと金の子牛に拝み、祈っているアロンとイスラエルの民、その並べられた二つの場面は私たちに何を見せようとするのでしょうか。その内容は相対立するものです。共存できないものです。

この場面で非常に印象深いところはモーセが神から頂いた石板を投げつけるところです。これはシナリオにもないアドリブの行為です。神様すらも気にしないモーセの行動。怒りまくって民に大切な石板を投げつける根性、素晴らしい、拍手を送りたいです。この場面はイエスがエルサレムの神殿の中で神様も恐れずに、騒動を起こした時を思い出させます。イエスにも根性あり、2人ともど根性の人物だったでしょう。これも第3の誘惑に関わる内容ではないかと思えます。

もう一方、アロンはどうですか。指導者という立場に立っていますが、民から求められる通りにします。金の子牛はアロンがイメージした物です。32章の4節と8節を見ますと、彼らは金の子牛が自分たちをエジプトから導いてくれたと思うのです。それが指導者としての民をまとめる優れた能力と見えるかもしれませんが、判断能力をほぼ持っていない存在です。

出エジプト記の内容を見ますと、イスラエルの民の荒野での40年間、あらゆる誘惑との戦いの内容が描かれているのに築きます。水がないと、食べ物がないと、エジプトの肉鍋が懐かしいと、エジプトへ戻りたいと、ありとあらゆる誘惑との戦いでした。金の子牛は偶像以前に誘惑に負けた象徴です。

この場面における神から与えられた十戒の石板、律法とは何でしょうか。それはこれを持って「神様に頼るな。」「神から自立しなさい。」というものだと思います。神が見えないから偶像を造るのでは

なく、律法を持って自立しろと言われているような気がします。律法の第1も愛、第2も愛である。それは神を愛し、人を自分のように愛することというのです。即ち、神様に頼るのではなく、エゴに生きるのではなく、互いに約束を結び、契約を守り、互いに支えながら生きることです。モーセが石板を投げつけたのは、契約の破棄です。エゴに生きる人には契約が必要ありません。共に生きることを求めている共同体に必要なものです。金の子牛は契約の対象になりません。それはエゴの象徴です。偶像はエゴの象徴です。中身がありません。

整理しますと、第3の誘惑を拒むのは神様に頼らないことです。神様から自立する信仰です。これは一瞬、信仰に相反するよう見えます。しかし、大きな意味合いで、長期的な見方ではこれこそ神様が望まれることで、人類皆のためであることとなります。

イエスもモーセも神の国やカナンにおけるイスラエルを完成することはできませんでした。それはその後を生きる人々私たちの働きの分です。イエスのモーセの生涯とは、何時までも神様の保護に頼る働きではなく、成人した子供が親元を離れるように、神の保護、それすらも断り自らの力合わせでやって行かなければというモデルの提示であったと思います。(第191号・2011.11.20.証詞より)